

「大人概念」の日米比較

鈴木 乙 史

A Comparative Study of Adult Concepts Between Japan and the U. S. —

The purpose of the study was to examine the characteristics of Japanese concepts for adults. The first hypothesis was that the Japanese would not have clear criteria for "a good adult". A comparative study of late adolescents and young adults in Japan was conducted, using a measurement scale which was developed based on the results of a pilot study on criteria for "a good adult". The participants consisted of Japanese college students and Japanese singles in their twenties. The results indicated that, contrary to the hypothesis, they had clear concepts for adults. As for comparing Japanese and U. S. college students, the latter defined the following four criteria for adults: 1) financial independence; 2) care-taking independence; 3) mental independence; and 4) the state of being thoughtful. However, the Japanese had much broader conditions in addition to the above four criteria. Based on these findings, the study examined the psycho-social issues regarding the transition to adulthood among Japanese and U. S. late adolescents.

key words : adult concepts, independence from parents, transition to adulthood, cultural comparison

1. 問題

それぞれの文化・社会の特質は、そこに生まれ育つ人間の人格形成に強く影響すると考えられる。このような問題意識は、古くはフロム (Fromm, 1941) の社会的性格概念やリースマン (Riesman, 1950) の伝統指向型、内部指向型、他人指向型といった社会的性格などの研究をあげることができる。現代においても、アメリカ社会を研究したベラー (Bellah, 1991) は、アメリカ人の個人主義が自発的に形成されるのではなく、社会文化的な圧力によっていやおうなしに押しつけられるものであると指摘し、文化・社会の特質と人格との関連性を論じている。

本研究の基本的な考えは、それぞれの文化・社会には適応的とされる人格の在り方の幅が存在しているのではないかというものである。その幅は、明確に言語化されている場合もあれば、言語化されていない場合もあるが、そこに住む人々はそれを感じ取り、強い影響を受けていると考えるのである。それぞれの文化・社会の中で、親は子どもをよい子に、そして望ましい大人に育てようとしている。親のしつけの仕方や子どもに対する発達期待は、その文化・社会に固有に存在している望ましい大人イメージから暗黙の強い影響を受けていると考えられる。

アメリカでは、青年は家族からできるだけ早く離脱することを望み、社会もそれをよしとしている。アメリカでは子ども時代とは家を離れることのための準備期間と考えられている (Bellah, 1985)。アメリカ社会では、そのために、青年は幼いころから論理的な仕方で親やきょうだいに対して自己を主張し、相互に差異がある時には自己に有利になるように交渉することを奨励される。まさしく西欧の概念である「適応 (adjustment)」とは、自己が他者に働きかけることによって、自己実現できるように自他の

関係を調整 (adjust) することであり、順応 (adaptation) とは異なり、自己主張能力抜きでは実現されないと考えられている。

さらに青年は、親が尊敬できかつ身近に感じられる印として、親に対して賛成・反対をオープンに示し、親もそのような家庭が良い家庭であると認知し奨励する。またそのような家庭の青年の適応性も高くなる傾向が示唆されている (Grotevant & Cooper, 1986)。

アメリカでは、親から自立した自律的で独立心のある存在が大人であり、アメリカの子どもは、早期からそのような大人の特質を身に付けるように求められている (東, 柏木 & ヘス, 1981; Bellah, 1985; Moore, 1987)。現実にもミドルクラスの家では、子どもは高校卒業 (18 歳) 後、家を離れはじめる。それゆえ、家を離れること (Home-Leaving) については多くの研究がなされている (Sullivan & Sullivan, 1980; Moore & Hotch, 1981, 82, 83; Anderson & Fleming, 1986; Moore, 1987; Daniels, 1990. etc)。

しかしながら、日本においては、家を離れること自体が、青年期から大人への移行の重要な条件になっていないように見えるし、また、親は親自身の必要のために、子どもを親元に引き止めようとする傾向を持っているようにも見える。あえて言えば、結婚までは、青年は家に留まることが一般的な規範となっている社会であると言えるのである。それゆえ、日本においては、家を離れることについての研究は、ほとんどなされていない (鈴木, 1997)。

このような日本の青年を、アメリカの青年を基準として対比させると、彼らは親に依存し自立しようとしないうる“子ども”であるかのようにとらえられる。事実そのような観点からの批判も多い。しかしながら、日本の文化・社会においては、他者を配慮できることが重要視され、そのような配慮なしに自己を主張したり行動したりすることや、賛成・反対をオープンに表明する態度は、配慮に欠け、時には“大人げない”と評価される。また、どのような人間関係よりも、親子関係を重要視する傾向は、現代においても日本社会に根強く存在していると考えられる。

日本においては、よい子イメージは相対的に明確である。柏木・東(1971)は、子どもから見たよい子・わるい子の判別基準を分析し、「意図的行為の統合」「成人の社会的基準への適合」「子ども同志の相互関係を含む社会的基準への適合」「社会的協調」の4因子を見いだしている。また、東(1994)は、日本人には「よい子アイデンティティ」といったものが存在することを示唆している。さらに、親の子どもに対する発達期待の研究からは、日本の親は、子どもに対してなっほしい子どもイメージを明確に持っていることが示されている(柏木, 1985)。

このように、明確な「よい子」イメージに対して、日本においては大人イメージそのものがきわめて曖昧であるように見える。さらに、青年期から大人への移行についての実証的・包括的研究は我が国にはほとんどなく、わずかに、青年期の終わりを明らかにしようとする津留(1963, 64)の成人特性に関する研究があるのみである。

本研究は、日本人の大人概念を明らかにする目的でなされた。日本人は、明確な大人概念を持っているだろうか。このことを明らかにするために、まず予備研究として、日本人を対象とした「よい子・よい大人」についてのエッセイ分析を行った。次いで本研究として、予備研究の結果をもとに作成した大人概念尺度を用いた日本人2群の比較と日米比較を行った。それらの結果を報告する。

2. 予備研究

(1) 目的

大学生と大人に実施した「よい子・よい大人」についてのエッセイ分析から、大人が見た「よい子・よい大人」イメージを明らかにする。またこの分析から、本研究で用いる調査項目を見いだす。「よい大人」単独では、エッセイを書き難いことが事前にわかっていたために、より書き易い「よい子」を導入として、エッセイを書いてもらった。

(2) 方法

対象者：大学生男女 33 名，20 歳代から 50 歳代の社会人男女 47 名，40 歳代から 50 歳代の専業主婦 23 名の計 103 名。

手続き：研究に協力してくれた上記の対象者に，よい子・よい大人についてのエッセイを原稿用紙 10 枚以内で書いてもらった。内容からよい子・よい大人の特徴を示す形容詞と短文を全て拾いだし，KJ 法を参考にして内容の類似度と出現頻度から内容分析をおこなった。

(3) 結果と考察

エッセイから拾いだされた形容詞や短文は非常に多様であった。それゆえ，内容分析に用いた項目は，2 名以上の対象者が記述した項目のみを対象とした。その結果，日本人のよい子イメージは，主として①成績がよく，勉強ができる，②ききわけがよく，手がかからず，親や教師の言うことをよく聞き，大人にとって都合がよく，③まじめで，素直，従順な，④品行方正で，礼儀正しく，他人に迷惑をかけず，⑤活発で，明るく，思いやりがあり，友達と仲良くできる，といったポジティブな内容の項目群と，⑥無理をし，不安が強く，自己を押し殺している，といったネガティブな内容の項目群から構成されていることがわかった。第 6 番目の項目群は，“いわゆるよい子”の持つネガティブな側面の反映と考えられた。

これに対して，よい大人についての記述はまともならず，広い範囲にわたっていた。またよい子イメージに比べて記述数は少なく（よい大人／よい子 = 231 個／284 個），まとまった記述をすること自体が困難なようであった。

しかしながら，よい大人イメージは，①夫婦関係：記述例「夫婦円満に暮らせる」，②家族関係：「家族を大切にする」，③子どもとの関係：「子どもをよくしつけられる」，④他者との関係：「他人のことを考えられる」，⑤社会との関係：「社会的な義務や役割を果たせる」，⑥自己との関係：「自分のことをよく知っている」，⑦経済：「経済的に自立している」，⑧仕

事：「仕事ができる」、⑨親との関係：「親の面倒を見ることができる」、⑩その他の性格・態度・能力など：「思いやりがある」、「性的魅力がある」、「謙虚である」、「リーダーシップがある」など、多数の要素から構成されていることがわかった。

またよい大人イメージとよい子どもイメージの記述内容を比較してみると、日本においてはよい子とよい大人との間にはギャップがあり、非連続的で、「よい子」がそのまま成長しても「よい大人」にはならないと考えられる。例えば、よい子イメージには、「成績が良く、勉強ができる」ということが大きな要素になっているが、それに直接対応すると考えられるよい大人イメージの「知的である」はたった1名に記述されたのみであった。このことはよい子イメージを構成している他の要素でも同様で、よい大人イメージには直接的に反映していなかった。

また、よい子に関しては、“いわゆるよい子”イメージが存在しており、そのイメージが持つネガティブな内容が記述されるが、よい大人に関してはそのような現象がみられなかった。

3. 本研究

(1) 目的

中・高校生の調査からは、大人になりたくないとする者が多くいることが知られており、その理由として「ずるい」や「自分勝手」といった大人のネガティブな側面が多く指摘されている（NHK 世論調査部，1984）。

本研究においては、これら大人のネガティブな側面に焦点づけるのではなく、青年がどのような条件を満たせば大人といえるようになるのかといった、ポジティブな側面に焦点をあてている。

そのような、いわば一人前の大人としての条件に日米間にどのような共通点と差異点があるのかを明らかにすることによって、日本人の大人概念を明らかにすることを目的にする。この意味で、よい大人に関するエッセ

イ分析(予備研究)から得られた項目を本研究で用いることは妥当であると考えられる。

(2) 方法

対象者：青年期後期の大学生を対象とする際に、日米間で大学生の平均年齢が等しくないことが予想された。そこで日本では、サンプルとして首都圏の大学生 100 名(男子 41 名, 女子 59 名)および、20 歳代の未婚の社会人 132 名(男子 42 名, 女子 90 名)、計 232 名を用いた。アメリカでは、San Francisco State University の大学生 110 名(男子 31 名, 女子 79 名)を用いた。

手続き：エッセイ分析は日本のみで行っている。それゆえ、そこから導きだされた項目だけでは日米比較研究には不十分であると思われた。そのため、Moore (1987), Moore & Hotch (1981, 82, 83) の Leaving-Home Strategy 研究の 20 の定義、およびアメリカにおける研究協力者との討論などから、大人の必要条件として考えられる 24 項目 (Table 1) を選び、それらの重要度を日米で評定してもらった。評定は 5 段階評定で、数値が大きいほど重要度が高くなるように得点化した。

(3), 結果と考察

対象者の平均年齢と標準偏差は、日本人大学生群では平均年齢 19.72 歳 (SD=0.90)、日本人社会人群は同 25.29 歳 (SD=2.27) であった。両群をあわせた日本人群では同 22.89 歳 (SD=3.31) アメリカ人大学生群では同 22.57 歳 (SD=5.09) であった。日本人群とアメリカ人大学生群間の t 検定の結果 ($t=0.60$, $df=154.1$) には、有意差がみられず、ほぼ同年齢集団を比較しえたと考えられる。

なお、日本人群を大学生に限定すると、アメリカ人(大学生)群との間には、1%水準の有意差 ($t=5.77$, $df=116.4$) がみられ、アメリカ人群の平均年齢が有意に高かった。

Table 1 大人概念項目

(Pは予備研究からの項目, MはMoore (1987)の項目を改訂したもの, Nは討論の結果新しく入れたもの)

項目

- | |
|---|
| 1. 定職をもっている (One must have a steady job.) M |
| 2. 結婚している (One must be married.) M |
| 3. 親である (子供をもっている) (One must have children.) M |
| 4. 経済的に自立している (One must be financially independent.) P |
| 5. 自分をよく知っている (One must know oneself well.) P |
| 6. 親と離れて住んでいる (One must live away from one's parents.) M |
| 7. 親の面倒を見ることができる (One can look after one's parent.) P |
| 8. 子どもを良くしつけられる (One must be good at child-rearing.) P |
| 9. 精神的に自立している (自分で決定できるなど)
(One must be mentally independent (e.g. one can make a decision.)) M |
| 10. 夫婦円満に暮らせる (One must be happily married.) P |
| 11. 知的である (One must be intelligent.) N |
| 12. 性的生活を受け入れている (One must enjoy one's sex life.) N |
| 13. 自分の身の回りのことができる (料理, 洗濯など)
(One must be able to take care of oneself (e.g. cooking, laundry, etc.)) N |
| 14. 他人のことを考えられる (One must have an empathy.) P |
| 15. 自分に責任が持てる (One must be responsible for one's action.) P |
| 16. 家族を大切に作る (One makes much of one's family.) P |
| 17. 社会的な義務や役割を果たせる (One can perform social roles and obligations.) P |
| 18. 仕事ができる (One must be able to do one's work well.) P |
| 19. 一人でも生きられる (One can live alone.) N |
| 20. 思いやりがある (One must be thoughtful.) P |
| 21. 男らしさ (男), 女らしさ (女) がある
(As for a man, he has masculine qualities; As for a woman, she has feminine qualities.) N |
| 22. 性的魅力がある (One must be sexually attractive.) P |
| 23. リーダーシップがある (One must own a leadership.) P |
| 24. 謙虚である (One must be modest.) P |

1) 日本人内比較

まず日本人の評定結果を, 大学生群と社会人群に分けて Table 2 に示した。この結果から, 日本人にとって大人とは, 多くのことを実現した存

Table 2 日本人の2群比較

項目	大学生 [n=100]	社会人 [n=132]	t 値
1、定職	3.73 (1.32)	3.58 (1.32)	0.86
2、結婚	2.69 (1.48)	2.86 (1.40)	1.42
3、親である	3.15 (1.55)	3.04 (1.44)	0.56
4、経済自立	4.44 (1.00)	4.57 (0.81)	1.06
5、自分知る	4.61 (0.72)	4.68 (0.69)	0.75
6、親と離れ	2.42 (1.22)	2.33 (1.25)	0.55
7、親の面倒	4.08 (1.05)	3.72 (1.13)	2.48*
8、子しつけ	4.13 (1.03)	4.02 (1.03)	0.81
9、精神自立	4.73 (0.71)	4.81 (0.49)	1.01
10、夫婦円満	3.74 (1.21)	3.69 (1.20)	0.31
11、知的	3.52 (1.15)	3.79 (1.08)	1.83
12、性的生活	3.37 (1.16)	3.21 (1.24)	1.00
13、身の回り	4.22 (1.06)	4.15 (1.04)	0.50
14、他人の	4.58 (0.71)	4.73 (0.52)	1.78
15、自分責任	4.77 (0.68)	4.92 (0.29)	2.07*
16、家族大切	4.51 (0.80)	4.47 (0.88)	0.36
17、社会義務	4.57 (0.84)	4.63 (0.71)	0.58
18、仕事でき	3.81 (1.16)	3.59 (1.15)	1.44
19、一人生き	3.64 (1.37)	3.56 (1.32)	0.45
20、思いやり	4.34 (0.91)	4.30 (0.99)	0.32
21、男女らし	3.42 (1.16)	3.53 (1.16)	0.72
22、性的魅力	2.66 (1.14)	2.72 (1.15)	0.40
23、リーダー	3.30 (1.10)	3.34 (1.13)	0.27
24、謙虚であ	3.47 (1.11)	3.47 (1.19)	0.00

数値は平均、() 内は標準偏差、 **... $p < .01$ *... $p < .05$

在であると考えられていることがわかる。平均値が4.0（「やや重要である」）以上の項目を取り出すと、10項目あった。それらは、項目4：経済的に自立している（経済的自立）、13：身の回りのことができる（身辺的自立）、9：精神的に自立している、5：自分をよく知っている、15：自分に責任が持てる（精神的自立）、16：家族を大切にする、8：子どもをよくしつけられる、17：社会的な義務や役割を果たせる、14：他人のことを考えられる、20：思いやりがあること、であった。逆に重要でない項目（平均値が3.0未満：「どちらともいえない」より重要でない）は、項目2、6、22

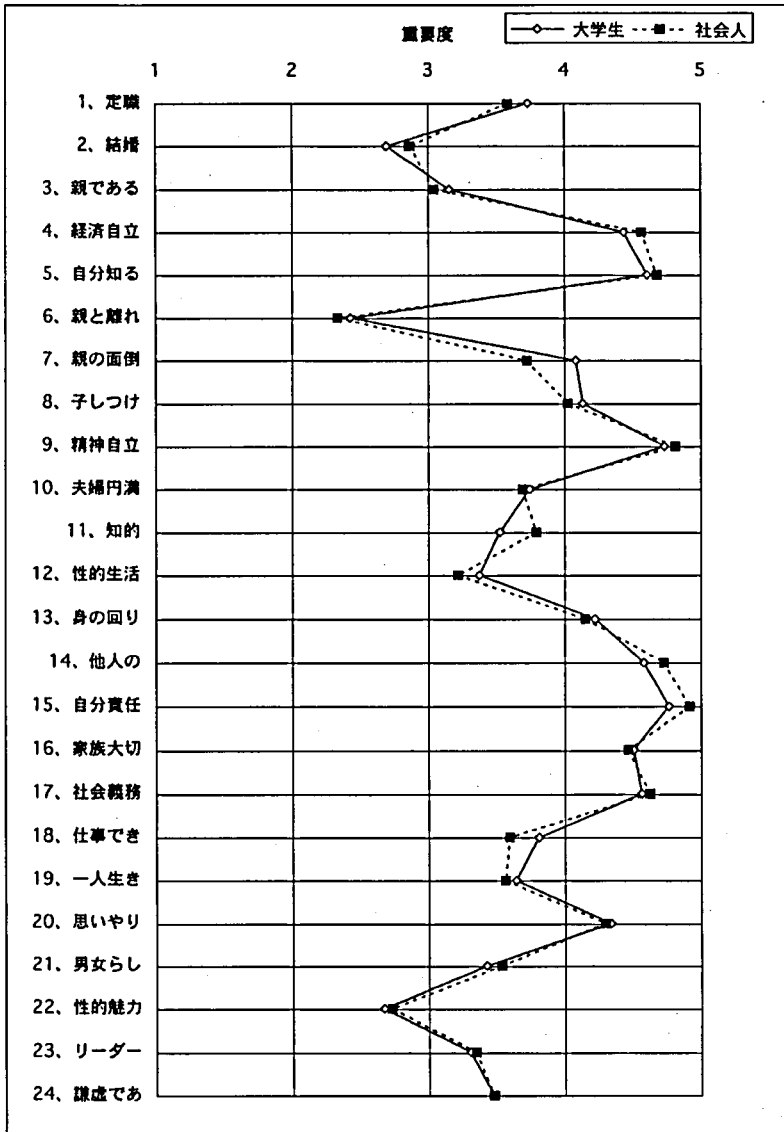


Figure 1 日本人の2群比較

の3項目にすぎなかった。このように、日本人において大人とは、親から自立した存在以上の存在であり、自分のことだけでなく、家族、子ども、社会そして他人をも思いやりをもって考えることができる存在である。

なおこの結果は、Figure1に示したように、大学生（平均年齢19.72歳）と社会人（同25.29歳）間でほとんど差がなく、青年期後期と成人前期の日本人にとって首尾一貫した結果であることがわかった。この結果、エッセイ分析からは曖昧のようにみえたが、青年後期や成人前期の日本人は、かなり明確で首尾一貫した大人概念を持っていることが示唆された。

2) 日米比較

Table 3, Figure 2は、日米2群間の比較の結果である。ここに示されたように、ほとんどの項目で日米間に有意差がある。アメリカでは、重要ではない(3.0未満)項目は、9項目あり、結婚、夫婦円満、親となる、子どもをよくしつけるなどは重要とされない。重要とされた(4.0以上)項目も少なく、6項目のみであった。アメリカでは、大人とは、項目4:経済的に自立し、13:身辺的自立ができ(料理や洗濯など)、9:精神的に自立し自分で決定でき、5:自分をよく知っていて、15:自分に責任を持って、かつ、20:思いやりがある存在である。項目5, 9, 15は、広い意味での精神的自立の項目と考えられるので、アメリカでは、親からの経済的自立、身辺的自立、精神的自立ができ、かつ思いやりをもっていれば、大人とされることが示された。

しかしながら日本では、これらの6項目もアメリカ同様に重要とされるが、さらに、家族を大切にし、子どもをよくしつけ、他人のことを考えられ、社会的な義務や役割を果たせなければ大人とは考えられないのである。

3) 信頼性の検討

これらの24項目の大人概念尺度について、クローンバックの α 係数を用いて内的整合性の推定を行った。日米を別々に算出したところ、日本で

Table 3 大人概念の日米比較

項目	日本人 [n=232]	アメリカ人 [n=110]	t 値
1、定職	3.65 (1.32)	3.76 (1.16)	0.75
2、結婚	2.79 (1.44)	1.72 (0.91)	8.34**
3、親である	3.09 (1.48)	1.61 (0.88)	11.51**
4、経済自立	4.51 (0.90)	4.02 (1.09)	4.10**
5、自分知る	4.65 (0.70)	4.32 (0.95)	3.24**
6、親と離れ	2.37 (1.23)	3.01 (1.27)	4.43**
7、親の面倒	3.88 (1.11)	3.32 (1.09)	4.37**
8、子しつけ	4.07 (1.03)	2.59 (1.25)	10.76**
9、精神自立	4.78 (0.60)	4.54 (0.69)	3.28**
10、夫婦円満	3.71 (1.20)	1.84 (1.08)	13.85**
11、知的	3.67 (1.12)	3.43 (1.22)	1.79
12、性的生活	3.28 (1.20)	2.75 (1.33)	3.68**
13、身の回り	4.18 (1.05)	4.44 (0.70)	2.70**
14、他人の	4.67 (0.62)	3.70 (0.85)	10.62**
15、自分責任	4.86 (0.50)	4.73 (0.62)	1.92
16、家族大切	4.49 (0.84)	3.74 (0.96)	7.32**
17、社会義務	4.61 (0.77)	3.99 (0.91)	6.17**
18、仕事でき	3.68 (1.16)	3.92 (0.83)	2.19*
19、一人生き	3.59 (1.34)	3.56 (1.12)	0.22
20、思いやり	4.32 (0.95)	4.05 (0.83)	2.55*
21、男女らし	3.48 (1.15)	2.43 (1.27)	7.60**
22、性的魅力	2.69 (1.15)	1.79 (1.06)	6.93**
23、リーダー	3.32 (1.11)	2.87 (1.30)	3.13**
24、謙虚であ	3.47 (1.15)	2.75 (1.27)	5.23**

数値は平均、() 内は標準偏差、 **... $p < .01$ *... $p < .05$

は、 $\alpha = .886$ 、アメリカでは、 $\alpha = .869$ であり、かなり高い信頼性がみられた。

4) 因子分析の結果

主成分分解の後にバリマックス回転を用いて因子分析をおこなった結果、日本では、Table 4のように6因子、アメリカではTable 5のように7因子がみだされ、日米で因子構造が異なることがわかった(固有値1以上。全項目が、因子負荷量.45以上)。

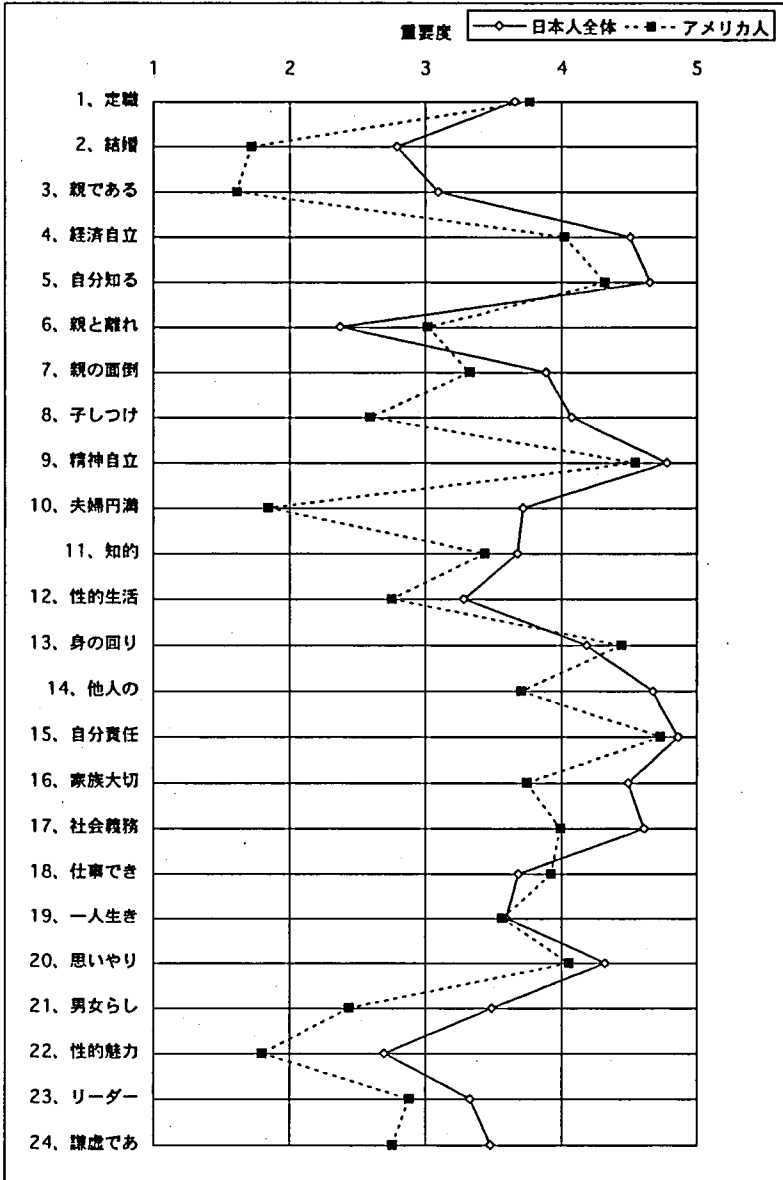


Figure2 大人概念の日米比較

Table 4 日本人群の因子分析結果

項目番号と内容	factor1	factor2	factor3	factor4	factor5	factor6
9 精神的に自立している	0.846	0.027	0.046	0.085	0.205	-0.041
15 自分に責任が持てる	0.813	0.072	0.048	0.102	0.117	-0.052
14 他人のことを考えられる	0.725	0.147	-0.05	0.301	0.017	0.118
5 自分をよく知っている	0.692	0.151	-0.106	0.079	-0.212	0.241
17 社会的な義務や役割を果たせる	0.566	-0.02	0.098	0.114	0.483	0.241
21 男らしさ、女らしさがある	0.13	0.747	0.079	0.082	0.139	0.209
24 性的魅力がある	0.149	0.716	0.019	0.341	0.145	-0.106
23 リーダーシップがある	0.085	0.708	0.14	0.148	0.172	0.40
22 謙虚である	-0.072	0.673	0.165	-0.059	0.05	0.401
3 親である	0.045	0.057	0.891	0.101	-0.071	-0.002
2 結婚している	-0.023	0.104	0.887	0.091	0.033	0.045
1 定職を持っている	0.058	0.052	0.616	0.099	0.43	0.119
6 親と離れて住んでいる	-0.095	0.127	0.53	-0.002	0.102	0.405
16 家族を大切にす	0.165	0.248	0.022	0.801	0.045	-0.075
20 思いやりがある	0.238	0.387	-0.16	0.634	0.051	0.105
10 夫婦円満に暮らせる	0.058	0.14	0.299	0.609	0.254	0.233
8 子どもを良くしつけられる	0.226	-0.047	0.305	0.548	0.272	0.277
7 親の面倒を見ることが出来る	0.174	-0.025	0.284	0.471	0.223	0.239
18 仕事ができる	-0.001	0.413	0.071	0.164	0.666	0.013
19 一人でも生きられる	0.054	0.338	-0.082	0.158	0.664	0.126
13 自分の身の回りのことができる	0.32	0.051	0.088	0.222	0.551	0.46
4 経済的に自立している	0.456	0.118	0.379	0.131	0.475	0.029
12 性的生活を受け入れている	0.082	0.237	0.222	0.228	0.106	0.761
11 知的である	0.248	0.455	-0.052	0.146	0.172	0.499
固有値	7.13	2.74	2.17	1.23	1.22	1.03
寄与率 (%)	29.7	11.4	9.1	5.1	5.1	4.3
累積寄与率 (%)	29.7	41.1	50.1	55.3	60.4	64.7

Table 5 アメリカ人群の因子分析結果

項目番号と内容	factor1	factor2	factor3	factor4	factor5	factor6	factor7
1 定職を持っている	0.783	0.068	0.123	0.159	-0.026	0.50	0.018
4 経済的に自立している	0.783	0.256	0.078	-0.14	0.116	0.015	0.055
17 社会的な義務や役割を果たせる	0.616	-0.117	0.125	0.13	0.343	0.031	0.131
19 一人でも生きられる	0.576	0.027	0.137	0.228	0.257	0.154	0.226
18 仕事ができる	0.574	-0.135	0.193	0.509	0.097	0.13	0.021
13 自分の身の回りのことができる	0.563	-0.191	0.25	0.015	0.173	0.397	-0.123
6 親と離れて住んでいる	0.472	0.361	0.109	-0.294	0.04	-0.064	-0.126
2 結婚している	0.003	0.886	0.129	0.071	-0.036	0.02	0.082
3 親である	0.023	0.861	0.129	0.047	0.006	-0.033	0.031
10 夫婦円満に暮らせる	0.008	0.835	0.075	0.008	-0.014	0.028	0.163
8 子どもを良くしつけられる	0.182	0.464	-0.018	0.197	-0.353	0.451	0.259
12 性的生活を受け入れている	0.225	0.175	0.716	0.024	-0.175	0.231	-0.059
16 家族を大切にする	0.328	0.119	0.693	0.001	0.214	0.136	-0.016
23 リーダーシップがある	0.173	0.002	0.609	0.15	-0.034	0.002	0.493
24 性的魅力がある	0.20	0.447	0.608	0.205	0.036	-0.015	0.252
11 知的である	0.074	0.047	0.586	0.273	0.43	0.044	-0.026
21 男らしさ、女らしさがある	0.102	0.378	0.181	0.723	-0.079	0.002	0.102
20 思いやりがある	0.125	-0.122	0.079	0.644	0.33	0.388	-0.027
9 精神的に自立している	0.241	-0.166	-0.062	0.274	0.727	0.227	-0.065
5 自分をよく知っている	0.268	0.082	0.16	-0.069	0.711	0.087	0.308
14 他人のことを考えられる	-0.041	0.112	0.212	0.185	0.125	0.782	0.115
15 自分に責任が持てる	0.422	-0.092	0.045	-0.072	0.172	0.667	-0.054
7 親の面倒を見ることができる	0.061	0.207	-0.011	-0.016	0.087	0.096	0.863
22 謙虚である	0.118	0.226	0.216	0.554	0.063	-0.098	0.597
固有价值	6.22	3.49	1.86	1.38	1.32	1.20	1.02
寄与率 (%)	25.9	14.5	7.7	5.7	5.5	5.0	4.3
累積寄与率 (%)	25.9	40.5	48.2	53.9	59.4	64.4	68.7

日本人群におけるそれぞれの因子は以下のように命名された。なお、括弧内の数値は、その因子に含まれる項目の重要度評定の平均値であり、因子間の相対的な重要性を示す指標と考えられる。

JF 1：精神的に自立をし他者や社会をも配慮できる (4.71)

JF 2：男らしい・女らしい魅力がある (3.24)

JF 3：自分の家族を持っている (2.97)

JF 4：家族を大切にし思いやりがある (4.09)

JF 5：経済的・身辺的に自立し一人でも生きられる (3.99)

JF 6：知的で性を受け入れている (3.48)

これに対してアメリカ人群での7因子は以下のように命名された。

UF 1：経済的・身辺的に自立し一人でも生きられる (3.81)

UF 2：自分の家族を持っている (1.94)

UF 3：性的で知的で家族を大切にす (2.92)

UF 4：男らしさ・女らしさがあり思いやりがある (3.24)

UF 5：精神的に自立している (4.43)

UF 6：自分に責任を持ち他者のことも考えられる (4.22)

UF 7：謙虚で親の面倒をみることができる (3.04)

両群を、因子構造と因子別評定平均値と比較すると、類似性はあるものの、大きな相違があることがわかった。日本人群においては、精神的に自立をし他者や社会をも配慮できる (JF 1) こと、また家族を大切にし思いやりがある (JF 4) こと、そして経済的・身辺的に自立し一人でも生きられる (JF 5) ことの重要度が高く評定されている。

アメリカ人群では、経済的・身辺的に自立し一人で生きられる (UF 1) ことと、精神的に自立し (UF 5) 自分に責任を持ち他者のことも考えられる (UF 6) ことが高く評定されている。また UF 7 は、日本的な特性に関する因子と考えられ (評定平均値は3.04で、ほぼ「どちらともいえない (3.0)」であった)、実質的にはアメリカ人群も6因子構造と考えることが妥当であろう。

さらに、日米で各因子に含まれる項目を比較しながら検討すると、いくつかの興味深い点を指摘できる。まず、日本人群では、精神的自立と他者や社会への配慮が結び付いていることが興味深い。日本人においては、精神的自立とは、自分個人の問題でも親との問題でもなく、広く他者や社会との関係の問題のように見える。また、日本人群では「定職をもつこと」は、「結婚」や「親になること」と結びついている (JF 3) のに対して、アメリカ人群では、親と離れて「一人でも生きられること」(UF 1) と結びついている。

日本人群では、物理的に自分の家族を持つこと (JF 3) は、家族を大切にすること (JF 4) とは別の因子であり、大人の条件としては、それほど重要ではないと考えられている。それに対して、家族を大切にすることというのは、大人の条件として重要で、それは、夫婦関係、親子関係、老親との関係をうまくやっていくことであり、「思いやり」が必要ととらえられている。このように、日本人群では夫婦関係・親子関係・老親との関係が、家族を大切にし思いやりがあること (JF 4) にまとまっている。

これに対して、アメリカ人群では、「思いやり」は「男らしさ・女らしさ」と結びついている。また、大人の条件としては重要とはされていないが、アメリカ人群で自分の家族を持つこと (UF 2) は、夫婦と子どもの核家族を持つことであり、老親との関係は含まれていなかった。また、「家族を大切にする」(UF 3) ことは、「性的魅力」や「性生活」、「リーダーシップ」や「知性」と関連していた。このように、両群には因子構造に大きな相違があることがわかった。

4 結論

以上のような結果から、日本人には、明確な大人概念が存在していると考えられる。その特徴を日米比較から検討すると、次のように考えられる。まずアメリカ人群では、大人概念は非常に明確で、親から経済的・身辺

的・精神的に自立し、なおかつ思いやりがあれば、それは大人であると考えられる。親も青年も発達の早期から大人になることを求め、それを目標にして児童期・青年期を過ごす。現実にもアメリカの青年は18歳頃になると親の家を離れ始めるし、親も社会もそれを良しとするのである。

これに対して、日本では、親からの自立や思いやりも重要ではあるがそれだけでは不十分で、老親との関係をも含んだ「家族を大切にし」、「子どもをよくしつけ」、「他人のことを考えられ」、「社会的な義務や役割を果たせる」といった、家族や他者や社会との関係をうまくやっつけられる存在でなければ「大人」とはされない。

それゆえ、どこまで発達したら大人であるかが不明確になる。何を具体的な努力目標として、子どもは、児童期・青年期を過ごせばよいのかが曖昧になるし、親もどのようにしつければよいのかが曖昧になる。青年期を過ぎてもなかなか大人になれない日本の青年が生まれる理由の一つとして、日本人が上記のような広範な条件を含んだ大人概念を持っていることを指摘しうるのである。

青年から大人へと移行するプロセスを、日米で比較してみると最も大きな相違は、家を離れるかどうかということである。アメリカで家を離れることは、自動的に親からの自立の3要素、すなわち経済的自立、身辺的自立、精神的自立の達成を求められるということである。アメリカの青年は、児童期からそのための準備を親や社会から要求されている。

日本においては、このような3要素を含む自立が達成されること自体がまれである。すると、親に経済的にも身辺的にも依存している青年の精神的自立とは、どのようなものかが疑問となる。また、日本においては、明確な「よい子」イメージと、本研究で示唆された広範な「よい大人」イメージが存在するが、その解離は大きく、その間をつなぐ青年の役割や課題が明確ではないのである。

最後に、本研究で検討した大人概念は、後期青年と成人前期の対象者による評定をもとにしている。いわば、大人の条件を、大人になりつつある

者が評定したという限定がある。しかしながら、大人には「成熟した大人」という別のイメージも存在する。中年期を対象として、発達の比較と日米比較をした場合、異なる結果が現れる可能性がある。また、本研究では対象者数が限定されていたために、性差を検討できなかった。またアメリカ人といっても人種や背景としている文化によって、大人概念が異なっている可能性がある。これらのことは、今後の研究課題としたい。

引用文献

- Anderson, A. & Fleming, W. M. (1986) Late Adolescent' Home-Leaving Strategies: Predicting Ego Identity and College Adjustment. *Adolescence*, 21, 82, 453-459.
- 東洋 (1994) 日本人のしつけと教育 東京大学出版会
- 東洋, 柏木恵子, ヘス (1981) 母親の態度・行動と子どもの知的発達 東京大学出版会
- ベラー, R. 島園 進・中村圭志訳 (1991) 日本語版への序 心の習慣 みすず書房 V-VII
- Bellah, R., et al. (1985) *Habits of the Heart*. University of California Press
- Daniels, J. A. (1990) Adolescent Separation-Individuation and Family Transitions. *Adolescence*, 25, 98, 105-116.
- フロム, E. 日高六郎訳 (1951) 自由からの逃走 東京創元社 (Fromm, E., 1941 *Escape from Freedom*. Newyork: Holt, Rinehart and Winston Inc.)
- Grotevant, H. & Cooper, C. (1986) Individuation in Family Relationships; A Perspective on Individual Differences in the Development of Identity and Role Taking Skills in Adolescence. *Human Development*, 29, 82-100.
- 柏木恵子 (1985) 発達期待 鈴木乙史他編 パッケージ・性格の心理 1, 性格の発達と形成 プレーン出版 1-16.
- 柏木恵子, 東洋 (1971) 児童における“よい子”“悪い子”の概念とその発達 心理学研究, 41, 6, 295-306.
- Moore, D. (1987) Parent-adolescent Separation: The Construction of Adulthood by Late Adolescents. *Developmental Psychology*, 23, 2, 298-307.
- Moore, D., & Hotch, D. (1981) Late Adolescents' Conceptualizations of Home-Leaving. *Journal of Youth and Adolescence*, 10, 1, 1-10.
- Moore, D., & Hotch, D. (1983) The Importance of Difference Home-Leaving

Strategies to Late Adolescents. *Adolescence*, 18, 70, 413-416.

NHK 世論調査部編 (1984) 中学生・高校生の意識 日本放送出版協会

リースマン, D. 加藤秀俊訳 (1964) 孤独な群衆 みすず書房 (Riesman, D., Glazer, N., & Denney, R., 1950 *The Lonely Crowd - A Study of the Changing American Character*. New Haven: Yale University Press.)

Sullivan, K. & Sullivan, A. (1980) Adolescent-Parent Separation. *Developmental Psychology*, 16, 2, 93-99.

鈴木乙史 (1997) 青年から大人への移行—アメリカにおける青年の分離—個体化研究の展望— 母子研究, 18, 15-22.

津留 宏 (1963) 成人特性の発達—青年期の終期測定の研究—教育心理学研究, 11, 4, 1-10.

津留 宏 (1963) 成人特性の発達—青年期の終期測定の研究—教育心理学研究, 12, 4, 1-9.